

令和元年6月22日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02626

研究課題名(和文)ハンガリー語動詞接頭辞の多義構造にみられる文法化と活性化

研究課題名(英文)Grammaticalization and Activation of Hungarian Verbal Prefixes

研究代表者

早稲田 みか (Waseda, Mika)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：30219448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ハンガリー語の接頭辞は本来は方向を表す要素だが、動作の完了を表す要素へと文法化している。文法化が進んでいる接頭辞 *meg* と *el* は、どちらも同じように完了を表すが、両者の間には微妙な意味や用法の差異がある。例えば、動詞 *jön*「来る」に接頭辞がついた *megjön* と *eljön* の用法を分析した結果、前者は「来る」という移動の最終局面に、後者は移動の過程も焦点に入っていることがわかった。これは語源的に *meg* は「後ろへ」という意味、*el* は「離れて」という意味を有していたことと関連しており、そうした意味が活性化されることにより、意味の違いを説明できるという結論が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、ハンガリー語動詞接頭辞の多義性の背景にあるメカニズムを認知言語学的な分析により明らかにすることで、文法化や活性化など、広く言語一般に観察される現象になんらかの動機付けがあることを指摘することができたこと、また、ハンガリー語動詞接頭辞のもつ意味や機能の差異に一定の説明を与えることができたことに意義があると考えられる。

社会的意義としては、本研究において得られた知見は、具体的には、ハンガリー語の記述、ハンガリー語・日本語辞書の作成、および日本におけるハンガリー語教育の場において実践的に役立てることができることが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：The Hungarian verbal prefixes have directional meanings and originally function as adverbials, but in some cases they are pure perfective markers, that is they are grammaticalized. The verbal prefix *meg* and *el* has genuine perfectivizing function in cases such as *megjön* and *eljön*, both meaning 'come'. Examining the difference between the two prefixed verbs, it became clear that the former focuses on the final phase of the movement, the latter, on the other hand, focuses on the process of the movement. This difference can be explained by the activation of the original adverbial meaning of the prefix, *meg* means 'back' and *el* means 'far off'.

研究分野：ハンガリー語学

キーワード：ハンガリー語 動詞接頭辞 文法化 活性化

1. 研究開始当初の背景

ハンガリー語の動詞接頭辞は、意味的にも統語的にも記述が困難をきわめ、学習上も習得がきわめて難しい文法カテゴリーである。とりわけ、その意味と機能はきわめて多様かつ多義的である。しかし、一見かなりかけ離れているように見える異なる意味の背景に、なんらかの必然的関係性があることが明示できれば、ハンガリー語教育や辞書の記述にも役立つはずである。

そこで、これまでの研究においては、英語の場所関係を表す前置詞の分析に使われている認知意味論的枠組みを応用して、ハンガリー語動詞接頭辞の分析を行ってきた。その結果、ハンガリー語の動詞接頭辞の多義的用法は、もっとも基本的な空間的用法(基本的イメージ・スキーマ)からメタファーやメトニミー、視点の移動、焦点化、背景化などによって意味拡張され、時間をはじめとする抽象的な関係、さらに完了アスペクトを付加する機能に拡大され、文法化していったと考えられることが確認できた。

また、動詞接頭辞の移動の方向を表す語彙の意味が希薄になり、文法的意思を獲得する文法化のプロセスは、構文変化を引き起こすことも確認できた。すなわち、完了アスペクト機能をもつ接頭辞が付加した動詞の構文は目的語を必須項としてとり、意味と構文が密接に関連していることがわかった。

しかし、この一連の研究の過程で、新たな問題点として、完了アスペクト機能を有する動詞接頭辞には、単に動作や状況の完了を表すだけでなく、微妙なニュアンスを付加する役割があることがわかってきた。この微妙な意味の差異については、先行研究では明確に指摘されておらず、当然ながら辞書にも記述されていない。これが本研究に至った研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、言語の多義性の構造、多義性が生じるメカニズムについて、文法化と意味の活性化の観点から考察することである。ハンガリー語の動詞接頭辞は、「上へ」「下へ」「中へ」「外へ」など、空間移動の方向を表す基本的(語彙的)意味を有しているが、動詞に接続して、様々な抽象の意味や、文法化して完了アスペクト(文法的意思)を表したりする。この文法化した動詞接頭辞の用法には、完了アスペクト付与だけでは説明できない意味の差異や、微妙なニュアンスがある。本研究では、こうした意味の差異は、文法化した動詞接頭辞が完全に語彙的意思を失ってはならず、本来の語彙的意思が活性化されることにより生じると仮定し、この仮説を検証し、文法化と活性化により多義性が生じるメカニズムを明らかにすることである。さらに、その成果をハンガリー語教育や辞書記述に役立てることである。

3. 研究の方法

動詞接頭辞の多義性が生じるメカニズムを文法化と活性化の観点から明らかにするために、以下の作業を行った。

動詞接頭辞が使用されている文の収集と分析を行った。

コーパスおよび小説などを利用して談話構造がわかるような文例を収集し、前提条件の有無やニュアンスの差異について分析した。具体的には、ハンガリー科学アカデミー言語学研究所の言語コーパス Magyar Nemzeti Szövegtár (<http://corpus.nytud.hu/mnsz/>) を利用して、動詞接頭辞 *meg* 付きの動詞と接頭辞なしの動詞の用例、および、同じ基動詞にそれぞれ異なる動詞接頭辞 *meg* と *el* が接続している用例を、コンテキストがわかるように、なるべく前後の文が多くなるようにして収集した。

コーパスでは前後の語数がある程度限られ、前後関係が十分にわからないことがあったため、小説など(Grecsó Krisztián 2016. *Jelmezball*. Magvető Könyvkiadó, Budapest. Krasznahorkai László 2003. *Északról hegy, Délről tó, Nyugatról utak, Keletről folyó*. Magvető Könyvkiadó, Budapest. Nadas Péter 1977. *Egy családregény vége*. Jelenkor Kiadó, Budapest. Szvoren Edina 2012. *Nincs, és ne is legyen*. Új Palatinus Könyvesház, Budapest) のストーリー性があり、文脈がわかりやすい、比較的長めのテキストを選択して、上記のタイプの用例を収集した。適宜、グーグル検索も利用した。

とくに、基動詞 *jön*「来る」、*kezdődik*「始まる」、*indul*「出発する」など、Vendler (Vendler, Zeno 1957 *Verbs and Times*. *The Philosophical Review*, 66, 2. 143-160.) による動詞のアスペクト分類において「到達動詞 (Achievements)」と呼ばれる動詞クラスに属する動詞についての用例を集中的に収集した。到達動詞はそもそも完了的な事象を表すことから、これにさらに完了アスペクトを付与してもアスペクト的には変化せず、完了アスペクト付与だけでは説明できない微妙な意味の差異を有していると考えられるからである。

こうして収集したデータを整理し、辞書の記述やネイティブの判断などを参考にしながら、意味の差異を分析した。

同時に、文法化や活性化についての文献資料を収集・精査し、微妙な意味の差異がなぜ、どのように生じるのかを考察した。また、成果をハンガリー語教育、ハンガリー語・日本語辞書記述へ応用する方法を検討した。

4. 研究成果

上で述べたように、ハンガリー科学アカデミー言語学研究所の言語コーパスや文学テキストを利用して、動詞接頭辞 *meg* 付きの動詞と接頭辞なしの動詞の用例、および、同じ基動詞に異なる動詞接頭辞 *meg* と *el* が接続している用例を、コンテキストがわかるようにかたちで収集した。そのなかから、「来る」という意味の基動詞 *jön* に接頭辞 *meg* と *el* が接続した *megjön* と *eljön* の使用例を取りあげて、用法のちがいを辞書の記述なども考察しながら分析した。

いずれの動詞も「来る」という意味であるが、辞書記述によれば、*megjön* は「来ることがわかっているモノ、知らせ、荷物、季節などが来る」、*eljön* は「話し手の方へ来る」「なんらかの出来事の起きる時が来る」のように、共起する主語や状況に差異があることがわかる。こうした用法の差異は収集した文例によっても確認することができた。さらに、収集した文例の分析から、*megjön* は「定期的な出来事がやって来る、再び戻ってくる」という「周期的な」出来事に使われたり、「来る、あるいは、来た瞬間に焦点があたっている」ことがわかった。これに対して、*eljön* は「遠くからやって来る」や「待ち望んでいたことがようやく来た」というコンテキストで使用されることが多いことがわかった。

こうした両者の意味のちがいは、動詞接頭辞の文法化により背景化された過程が活性化されると仮定すると、説明可能である。すなわち、接頭辞 *meg* も *el* も同じ完了を表す動詞接頭辞であるが、本来の語彙の意味は、それぞれ「うしろへ」と「はなれて、遠くへ」という方向を表すものであった。完了を表すハンガリー語動詞接頭辞 *meg* の文法化は、後方への移動のイメージスキーマが動作・様態の変化に比喩的に拡張され、さらに変化の過程が背景化され、変化の最終局面が焦点化された結果、形成されたといえる。*meg* は「時間通りに来た」のように「来た瞬間に焦点が当たっていることから、「来る」という移動の最終局面に、*el* は「遠くからやって来る」という意味から、移動の過程も焦点に入っていると考えられる。さらに、この背景化された移動・変化の過程が活性化されると仮定すると、接頭辞 *meg* と *el* の意味のちがいを説明できる。つまり、接頭辞 *meg* は「うしろへ」から「戻ってくる」という意味、さらに「周期的な出来事が来る」という意味が派生し、接頭辞 *el* は「離れて」から「遠くからこちらへ」という意味が生じると考えられる。こうして、機能としては同じ完了を表す異なる動詞接頭辞がもつ微妙な意味の差異は、背景化された過程が活性化されると仮定することにより説明可能であるという結論に至った。

また動詞接頭辞を含む文は、ある種の前提や文脈を必要とすることが指摘されているが、これも背景化された過程が存在するからであると説明できよう。

上記の結論を確認するために、さらに別の到達動詞 *kezdődik* 「始まる」や *indul* 「出発する」について同様の分析を行った。その結果、*megkezdődik* は「始まることがわかっていることが予定通り始まる」ことを、*elkezdődik* は「待っていたことや楽しみにしていたことなどがようやく始まる」というニュアンスのちがいがある場合があることがわかった。また、*megindul* は「出発する瞬間」に焦点があたっていること、*elindul* はどちらかという、それまで止まっていたものが「ついに出発する」というようなニュアンスがあることがわかった。両者の意味のちがいは、動詞接頭辞の文法化により背景化された過程（移動プロセス）が活性化された結果であるという仮定に合致している。しかし、こうした微妙な意味の差は、つねにあるわけではなく、どちらでも使える場合も多々ある。また、ハンガリー語母語話者の理解や判断もさまざまであったり、意味の差異自体も明確に認識されているとはいえない場合もあり、さらなる検討が必要であることもわかった。

微妙な意味の差異の存在を確認するために、どのような副詞と共起するかを、コーパスやデータベース検索などを利用して調査した。その結果、接頭辞 *meg* は「ちょうど」や「ぴったり」「時間どおりに」といった副詞と共起する頻度が高い一方、接頭辞 *el* は「ようやく」や「そろそろ」「ついに」といった副詞と共起する頻度が比較的高いことが確認された。これは、*meg* が移動・変化の最終局面に焦点をあてる機能を有しているのに対して、*el* は移動・変化の過程にも焦点をあてる機能があるという仮説を補強するものであり、両者の意味の微妙な差異が文法化の程度および移動・変化の過程の活性化の程度と関連していることがわかった。

到達動詞は完了アスペクトの付与により、移動・状態変化が完了するという意味が強調されることにより、「ついに～する」「やっと～する」といったニュアンスが加わると考えられる。このニュアンスが話者の達成感、話者の事態にたいする感情や評価であるとする、完了アスペクト付与からモダリティの意味あるいは語用論の意味が派生していることになる。もしそうだとすると、この事象は内容語から機能語へという文法化の「一方向性仮説」に対する反証になりうる可能性がある。この用法には日本語の「～てしまう」との共通点も見られることから、日本語との比較により、文法化の「一方向性仮説」を再考察することもでき、本研究をさらに発展させる可能性があることもわかった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

① Mika Waseda, Grammaticalization and Activation of Hungarian Verbal Prefixes, *Uralica*, 査読有,

17, 2018, 65-77

② Waseda Mika, Mi a különbség "a Megjött a tavasz" es "Eljött a tavasz" között?, 査読無, Hungarológiai Évkönyv, 18-1, 2017, 94-99

〔学会発表〕(計 4 件)

① 早稲田みか、ハンガリー語における定性表現、欧州学フォーラム 2018、2018

② 早稲田みか、ハンガリー語の語順、欧州学フォーラム 2018、2018

③ Waseda Mika, Hogyan tanítsuk, hogy a tanárok szobája a helyes es a tanárok szobájuk a helytelen 20. élőnyelvi konferencia, Budapest, Hungary, 2018

④ Waseda Mika, Mi a különbség "a Megjött a tavasz" es "Eljött a tavasz" között?, Nemzetközi Hungarológiai Kongresszus, Pécs, Hungary, 2016

〔図書〕(計 1 件)

早稲田みか、コヴァーチ・レナータ、白水社、『ハンガリー語の入門改訂版』、2019、257

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。